

第一次ユダヤ戦争の貨幣 — 図像と銘文のイデオロギー的側面 —

田 中 利 光

はじめに

ヘロデ（ヘロデ大王）は紀元前 37 年からユダヤを統治していたが、紀元前 4 年に死去すると、その領土は息子たちによって分割統治された。しかし、彼らの統治能力には限界があり、混乱が生じた結果、紀元 44 年にアグリッパ I 世が死去した後、ユダヤはローマによって完全に直接統治され、ユダヤ属州として編入された。ユダヤ属州では情勢が不安定で、紛争が頻発していたが、66 年から 73 年にかけてユダヤ人たちがローマに対抗して起こした大規模な反乱は、本格的な戦争へと発展した。反乱の進行に伴い、ローマ軍との激しい交戦が続き、67 年にはガムラが陥落し、70 年にはエルサレム神殿が破壊され、73 年にはマサダが陥落した。現代では、この大規模な戦いは「第一次ユダヤ戦争」と呼ばれている。この呼称は、132 年から 135 年にかけてユダヤ人たちが再びローマに対抗して起こした「バル・コクバの反乱」と区別するためのものであり、この反乱は「第二次ユダヤ戦争」とも称される。

第一次ユダヤ戦争期に鑄造されたユダヤ貨幣は、ヘンディンの分類によれば、第 1 年目（66 年 5 月～ 67 年 3 月）は、銀貨のシェケル貨が 3 種類、銀貨の半（ $1/2$ ）シェケル貨が 1 種類、銀貨の $1/4$ シェケル貨が 1 種類、青銅貨のプルタ貨が 1 種類ある。第 2 年目（67 年 4 月～ 68 年 3 月）は、銀貨のシェケル貨が 1 種類、銀貨の半シェケル貨が 1 種類、青銅貨のプルタ貨が 1 種類ある。第 3 年目（68 年 4 月～ 69 年 5 月）は、銀貨のシェケル貨が 1 種類、銀貨の半シェケル貨が 1 種類、青銅貨のプルタ貨が 1 種類ある。第 4 年目（69 年 4 月～ 70 年 3 月）は、銀貨のシェケル貨が 1 種類、銀貨の半シェケル貨が 1 種類、銀貨の $1/4$ シェケル貨が 1 種類、青銅貨の半シェケル貨が 1 種類、青銅貨の $1/4$ シェケル貨が 1 種類、青銅貨の $1/8$ シェケル貨が 1 種類ある。第 5 年目（70 年 4～ 8 月）は、銀貨のシェケル貨が 1 種類、銀貨の半シェケル貨が 1 種類ある。第 1 年目から第 5 年目のそれぞれのシェケル貨とプルタ貨（第 5 年目はプルタ貨はない）には、図像および銘文における表現の違いが認められる。なお、これらの貨幣の主要な鑄造地はエルサ

レムであった。また、67年にガムラ¹⁾でも、エルサレムで鑄造された貨幣を模した粗雑な青銅貨が、現存する証拠に基づけば、1種類鑄造されている (Hendin 2021: 315-323)。

第一次ユダヤ戦争期に鑄造された貨幣は、ガムラで鑄造されたものを除き、それ以前のユダヤ貨幣には見られないほど精巧な造りを有している。しかしながら、これらの貨幣の発行主体は明確ではなく、以下のような特徴が認められる。第一に、素材として銀が用いられている点が挙げられる。これは、ハスモン朝やヘロデ朝の貨幣において銀が使用されなかったことと対照的である。第二に、ユダヤ民族に特有の図像や銘文が刻まれており、これにより政治的・宗教的な主張がなされていると考えられる。本稿では、第一次ユダヤ戦争期の歴史的背景を踏まえつつ、当該期間に鑄造されたユダヤ貨幣の特徴について分析を試みる。

1. 第一次ユダヤ戦争の経緯

(1) 大反乱の背景

紀元66年から73年にかけてのユダヤ人の大反乱の歴史を知るための主要な典拠は、ヨセフスの『ユダヤ戦争について』(ΠΕΡΙ ΤΟΥ ΙΟΥΔΑΙΚΟΥ ΠΟΛΕΜΟΥ) であり (Josephus 1927a, vii)、写本によっては『ローマ人に対するユダヤ戦争の歴史』(ΙΣΤΟΡΙΑ ΙΟΥΔΑΙΚΟΥ ΠΟΛΕΜΟΥ ΠΡΟΣ ΡΩΜΑΙΟΥΣ) 等の拡大形の題目になっている (以後『戦記』と表記する)。『戦記』はヨセフスが実際にその渦中にいて目撃したことを書いたものであるため、記述の信頼性は高いとされている。一方で、彼は当初ユダヤ側の軍司令官であったが、反乱2年目(67年)に自らローマ軍に投降し、その後、ローマ側の顧問となり、ローマ当局の監視下で『戦記』の執筆に携わった。この経緯から、彼の記事にはローマ帝国の政治的意図を反映している可能性があり、どのような制約のもとで執筆されたかを考慮する必要があるとされている (Deutsch 2017: 11)。『戦記』はローマ皇帝ティトスの治世下(79年6月24日から81年9月13日まで)に完成した可能性が高いとみられている (Berlin and Overman 2002: 1)。

ユダヤの大反乱は、複合的な要因に起因すると考えられる。第一は、ローマ支配への抵抗であり、ユダヤ人はローマ帝国の支配下におかれ、重税の負担や宗教的抑圧に苦しんでいた。ローマの統治者はユダヤ教の儀式や慣習を十分に尊重せず、これがユダヤ人の間に深い不満を生じさせた。第二は、経済的圧迫であり、ローマによる過重な課税政策は、ユ

ダヤ人社会に深刻な経済的困窮をもたらした。特に地方の農民層においては生活基盤が脅かされ、社会的不安が増大した。こうした経済的苦境は、反乱の機運を高める土壌となった。第三は、宗教的対立であり、ユダヤ教とローマの多神教との間には根本的な宗教観の違いがあり、対立は次第に深刻化した。ローマ当局が神々への崇拜を強制する姿勢を見せたことに対し、ユダヤ人は強い反発を示した。第四は、政治的不安定であり、ローマ帝国の統治体制は、地方行政において腐敗や権力争いが頻発していた。統治的不安定さは、ユダヤ人の間に独立を求める動きを活性化させる要因となった。第五は、民族的誇りと独立心であり、ユダヤ人は強い民族的アイデンティティと独立への志向を有していた。ローマの支配に対する抵抗は、単なる政治的反発ではなく、民族的誇りに根差した運動でもあった。加えて、グッドマンは、ユダヤ人支配階級がその統治責任を果たせなかったことが民衆の不満を増幅させ、反乱の重要な要因になったと指摘している (Goodman 1987: 109-133)。

(2) 戦争の経緯

ユダヤ人のローマに対する抵抗は、66年5月にユダヤ属州担当のローマの財務官フロルスが発した、神殿宝物庫の金をローマに引き渡すという勅令から始まった。ユダヤ人の反乱は勢いを増し、66年9月にはエルサレムに駐留するローマ軍を制圧した。ユダヤ人穏健派による反乱阻止の試みは失敗に終わり、穏健派の指導者たちは最終的に熱狂的信者たちによって処刑された。ユダヤでの深刻な出来事を受け、シリア属州担当の総督ガルスは反乱を鎮圧するため第12軍団を率いてユダヤに進軍し66年10月にエルサレムに攻め入ったが、完全に制圧できず撤退を余儀なくされ、ベト・ホロンの戦いでユダヤ軍に敗北した。その戦いでユダヤ軍の勝利は、ローマにとって重大な敗北とみなされ、反乱の深刻さを認識する契機となった。

ユダヤの反乱軍はエルサレムを掌握し、国内の各地に司令官を任命し、ヨセフスはガリラヤ全域 (ゴラン高原のガムラを含む) の司令官となった。彼は67年春までにガリラヤ地方の多くの町を要塞化することに成功した (Josephus *J.W.* 2. 572-573)。ガルスが敗北した結果、ローマ皇帝ネロは反乱を鎮圧するために将軍ウェスパシアヌスを派遣した。ウェスパシアヌスは当時アカイアに滞在していたが、アレクサンドリアの軍団を招集するため息子のティトスを現地に派遣し、彼自身は陸路でシリアに向かい (Josephus *J.W.* 3. 8)、67年にユダヤに入った (図1)。

その後、ティトスはプトレマイス（＝アッコ）でウェスパシアヌス軍に合流し（Josephus *J.W.* 3. 64）、そこで兵を整えガリラヤに進軍した（Josephus *J.W.* 3. 127）。彼らはプトレマイス港から東進し、ガリラヤのヨタパタでヨセフスの軍団と交戦し、これを撃破した（67年7月）。ヨセフスはローマによる支配が神の摂理であると考えローマ軍に投降し、ウェスパシアヌスに面会すると彼とその息子がローマ皇帝になるとの「予言」をしたことから（Josephus *J.W.* 3. 399-402）、ウェスパシアヌスはヨセフスを厚遇するようになった。その後、ローマ軍はタリカイア（マグダラ）、ガマラ（ガムラ）¹⁾、タボル山、ギスカラ等を攻め落とし、ガリラヤ全域を制圧した。

ウェスパシアヌスは全軍を率いてエルサレムに進攻するつもりでカイサリアに戻った。しかしローマからネロの訃報（68年6月9日没）が届いたため、ネロに代わって皇帝になることを期待したウェスパシアヌスはエルサレムへの進攻を延期した。69年は「四皇帝の年」²⁾として知られるようにローマ帝国の政治的な不安定さが浮き彫りになっていた。ウェスパシアヌスは多くの軍団の支持を受けて、69年12月にローマに凱旋した。この時期、エルサレムには軍隊の指揮官がおらず、地方から流入してくる人々を無警戒に受け入れていた。そのため、暴漢らによる犯罪行為が多発し市中の治安は悪化した。ヨセフスは、そのような状況もエルサレムが破滅した一因であるとしている（Josephus *J.W.* 4. 181-188）。

エルサレムが内戦で混乱している最中に、ウェスパシアヌスは息子のティトスに戦争の総指揮を託し、ローマ軍は攻撃のために再結集した。ティトスは70年春に軍団を率いてエルサレムに到着し、猛攻撃の末、同年8月に神殿は崩落した（Josephus *J.W.* 6. 435）。

ローマ軍はその後、エルサレムの南約12キロメートルにあるヘロディオンを攻略し、73年5月には死海の西岸近くにある要塞マサダを陥落させた（Josephus *J.W.* 7. 252-406）。

2. 戦争期間の貨幣鑄造

(1) 図像の特徴

大反乱の勃発（66年）とともに、ユダヤの指導者たちは、貨幣の発行が紛争の本質（民族独立の政治的表現や宣言であり、闘争の一部）であることを示すものとしてエルサレムで鑄造を開始した。これらの貨幣には指導者の名前を刻んだものはない。このことから、これらはユダヤ

の全派閥の合同会議によって鑄造され、意図的に指導者の名前を強調しなかったのではないかと考えられている (Meshorer 2001: 115)³⁾。

ドイツによれば、第一次ユダヤ戦争期に鑄造されたユダヤ貨幣には、銀貨と青銅貨の両方が存在し、銀貨（銀の含有率 98 パーセント以上）のほうは、シェケル貨（1 シェケル）（約 14 グラム）（図 2）、半シェケル貨（約 7 グラム）（図 3）、1/4 シェケル貨（約 3.5 グラム）の 3 種類の金種があった。シェケル貨と半シェケル貨が大量に鑄造されたのに対し、1/4 シェケル貨は非常に珍しく、現存する証拠に基づけば、戦争 1 年目の銀貨が 2 枚、4 年目の銀貨が 4 枚出土しているのみである (Deutsch 2017: 20)。銀貨は 66 年から 70 年まで 5 年間鑄造された。

銀貨の図像と銘文の特徴として、シェケル貨の表面には、一般に「聖杯」とされる杯状の容器が描かれ、その周縁には古ヘブライ文字で鑄造年と「イスラエルのシェケル」の銘文が刻まれている。裏面には三つに分かれた枝に実るザクロの蕾が描かれ、周縁には「聖なるエルサレム」の銘文がある。半シェケル貨も同様に、表面に杯状の容器、周縁に鑄造年と「半シェケル」の銘文があり、裏面には三つのザクロの蕾と「聖なるエルサレム」の銘文が刻まれている。

青銅貨のほうは、半シェケル貨、1/4 シェケル貨、1/8 シェケル貨（図 4）、プルタ貨（1 プルタ）（図 5）の 4 種類の金種がある。

1/8 シェケル貨の表面には中央に束ねられたナツメヤシの枝葉と、その両側にシトロン（柑橘類の果実）が描かれている。これらは仮庵祭（スコット）で使用されるものである⁴⁾。周縁には古ヘブライ文字で鑄造年が刻まれており、裏面には杯状の容器と「シオンの贖いのために」の銘文がある。

プルタ貨（約 3 グラム）は、戦争の第 2 年目と第 3 年目に多量に鑄造された。表面には両側に取っ手の付いたアンフォラが描かれ、周縁には「2 年」「3 年」といった鑄造年が刻まれている。裏面には葡萄の枝葉と「シオンの自由」の銘文がある。

これらの貨幣に描かれた杯状の容器、ザクロの枝、アンフォラ、葡萄の図像は、いずれもユダヤ民族の宗教的・文化的象徴である。メシヨレルは、杯状の容器について、幅広で細い脚部を持ち、平らな底の半球形容器であることから、聖杯ではなく「オメル」（初穂の収穫物）を入れる器ではないかと指摘している (Meshorer 2001: 117)。ザクロは大祭司の衣の装飾（出エジプト記 28:33-34）、ソロモン神殿の正面に立つ二本の柱頭の装飾（列王記上 7:42）に用いられ、イスラエルの土地の豊

かさど豊穡の象徴とされてきた (Meshorer 2001: 118)。アンフォラは液体を入れる容器であり、神殿では水、ワイン、油の容器として使用された (『ミシュナ』「スッカー篇」 4: 8) (Meshorer 2001: 121)。葡萄の蔓と葉は、祭壇への葡萄酒の奉納儀式や、聖所の入口に設置された黄金の葡萄の木に見られるように、神殿との深い関連性を持つ (Meshorer 2001: 121)。

(2) 銘文の特徴

銘文についてドイツは、3つの異なるカテゴリーに分けることができるとしている。第一のグループは宗教的メッセージとイデオロギーのスローガンであり、「聖なるエルサレム」「シオンの自由」「シオンの贖罪」の銘文に見られる。第二のグループは聖書の時代からの思想の復活を表現しており、「イスラエルのシェケル」「シェケルの半分」「シェケルの4分の1」の銘文に見られる。第三のグループは新しい時代の幕開けを象徴するもので、年号は反乱の開始から数えられている (Deutsch 2017: 32-33)。

ドイツは、上記の3つのスローガンから以下のメッセージを読み取っている。「聖なるエルサレム」については、エルサレムはユダヤの首都であり、神殿の丘にある神殿とそこで行われていた儀式はユダヤ人を聖なるものにすると考えられていた。「シオンの自由」と「シオンの贖罪」は、いずれもローマの支配からの解放に関わる概念である。戦争の期間中、この自由は現実のものとなり、政治的独立への明確な意思が貨幣の鑄造という形で表現されていた。貨幣に古ヘブライ文字が使用されているのは、第二神殿時代の指導者たちが、自らを聖書に描かれた第一神殿およびユダ王国の時代と結びつけようとしたためである。同様に、「シオン」や「イスラエル」といった用語の使用には、第一神殿時代、第二神殿時代、そして第一次ユダヤ戦争という歴史的現実との連続性を強調する意図が込められていた。このように考えると、貨幣に刻まれたスローガンは、ユダヤ人反乱軍の願望を明確に表現していると言える。第一に、「聖なるエルサレム」や儀式的なシンボルによって示される宗教的自由への希求。第二に、「シオンの自由」や貨幣に記された年号によって表現される政治的独立への希望、そして反乱の終盤において「シオンの贖い」による神の救済を切望する姿勢である (Deutsch 2017: 39-40)。

3. ガムラでの貨幣の鋳造

ガムラ（ヘブライ語で גמלא）の遺跡は西の方角にガリラヤ湖を見下ろすゴラン高原の南部に位置し、頂部が非常に狭いラクダ（ヘブライ語で גמל「ガマル」）のこぶのような形をしていることからその名がついた（図6）。ヨセフスの『戦記』に記されているガムラの所在地は、長らく学術的に確定されていなかったが、1970年のグットマン（Gutman, Shmarya）による調査によってその位置が確認され、1976年以降はイスラエル古物局（Israel Antiquities Authority）によって継続的な発掘調査が実施されている。

ハスモン朝のアレクサンドロス・ヤンナイオスがガムラを建設したのは紀元前1世紀のことであり、その後もユダヤ人たちが居住を続けたとされる（Josephus *Ant.* 13. 394）。紀元67年、ローマ軍は二度にわたる攻撃の末、ガムラを占領した。この戦闘では約4,000人のユダヤ人が虐殺され、さらに約5,000人が崖から身を投げるなどして命を落としたと記録されている（Josephus *J.W.* 4. 1-83）。それ以来、ガムラが再建されることはなかった。

ガムラ遺跡は深い渓谷に囲まれた玄武岩の岩だらけの山の尾根にあり、浅い鞍部が尾根の残りの部分から隔てられており、防御上の利点を有していた。頂上は狭く尖っており北側は急斜面に落ち込み絶壁の地形である。そのため町は南斜面に建設された。町への主要な進入路は東部に通じており、その出入口部分に巨大な要塞壁が建設された。壁の近くにはシナゴークが建設され、その形状は長方形（25.5 × 17メートル）で、祭壇はエルサレムがある南西の方角に向けられている（図7）。近くには礼拝者が沐浴するためのミクヴェが設置されている。シナゴークの西側には玄武岩でできた多数の搾油装置があり、オリーブ油の生産が経済の基盤であったことを示唆している。

ガムラ遺跡の発掘調査において、第一次ユダヤ戦争時にガムラで鋳造された青銅貨が数枚発見された。そのうち7枚はイスラエル古物局によって保管されている（Syon 2014: 132）（図8）⁵⁾。これらの貨幣の銘文には、ヘブライ語とアラム語と見られる文字が混在して刻まれており、非常に粗雑で完成度が低いことから、戦時下の混乱の中で未熟な職人によって急造されたものであると考えられている。

ガムラの貨幣の図像および銘文は、同時期にエルサレムで鋳造された貨幣を模倣した可能性が高いが、ガムラの銘文には、他に類例のない特異な字形が確認されている。銘文の解釈には未確定な部分もあるが、

表面には「贖いのために」を意味する文言が、裏面には「聖なるエルサレム」と読める刻字が施されていた可能性が指摘されている (Syon 2017: 121)。硬貨発行の目的は、通貨としてよりは、ユダヤ人、そしておそらくはローマに対して政治的な声明を出すためのプロパガンダとして鑄造されたと見られている。

4. ローマの戦勝記念貨幣

第一次ユダヤ戦争に関しては、ローマ側も戦争当事者として勝利を記念する貨幣を発行している。ウェスパシアヌスは、同戦争の勝利を記念する金貨・銀貨 (図9)・青銅貨を、ローマをはじめ帝国内各地で多数発行した。ティトスも、自らの肖像を描いた金貨・銀貨・青銅貨を数種類発行している (Hendin 2021: 382-383, 386-417)。これらの貨幣は、ラテン語で IVDAEA CAPTA (「ユダヤ征服」の意) と総称され、その系列の貨幣として知られている。

おわりに

第一次ユダヤ戦争期に鑄造されたユダヤ貨幣は、ユダヤ人の政治的・宗教的アイデンティティ、そしてローマとの緊張関係を読み解く上で、極めて重要な視点を提供する史料である。第一に、反乱勢力がローマの支配からの独立を主張する手段として鑄造した銀貨や青銅貨には、「シオンの自由」や「聖なるエルサレム」といった銘文が刻まれており、強い政治的メッセージが込められている。第二に、宗教的・民族的アイデンティティの表現として、貨幣には古ヘブライ文字が用いられ、ザクロ、棕櫚の枝、葡萄の蔓や葉など、ユダヤ文化を象徴する意匠が施されている。これらは、ローマの多神教的かつ皇帝崇拜的な文化に対する明確な対抗姿勢を示すものである。第三に、貨幣の図像や銘文は単なる装飾ではなく、政治的・宗教的プロパガンダとして機能していた可能性がある。この点は、貨幣学と歴史学の交差を探る上で重要な論点となる。さらに第四に、これらの貨幣は反乱の年代、鑄造地 (主にエルサレム)、経済状況、さらには反乱指導者の意図を読み解くための一次資料としても機能する。考古学的文脈と組み合わせることで、当時の社会構造や思想潮流をより立体的に理解することが可能となる。

註

- 1) ヨセフスがギリシア語で表記している「ガマラ (Γάμαλα)」(Josephus *J.W.* 4. 2) はアラム語の音訳であり、ヘブライ語では「ガムラ (גמלא)」である。
- 2) 「四皇帝の年」とは、69年にローマ帝国で起きた政治的混乱を指す。ガルバ、オト、ウィテリウス、ウェスパシアヌスが帝位を得るために争い、短期間で交代し内紛が絶えない状況に陥った。最終的にウェスパシアヌスが帝位し平穏が戻った。
- 3) メショレルは、もう一つの可能性として、主要な銀行と貨幣の供給源である神殿の当局が貨幣を鋳造したことに言及している (Meshorer 2001: 115)。
- 4) 仮庵祭はレビ記 23章 40節を根拠とした祭りであり、過越祭(ペサッハ)、七週祭(シュブオット)とともに、ユダヤ教で最も重要な祭りの一つである。
- 5) イスラエル古物局が保有している7枚の貨幣重量と直径は次のとおりである。① 11.05g, 22.0mm、② 11.41g, 24.0mm、③ 12.26g, 23.0mm、④ 13.75g, 24.0mm、⑤ 13.80g, 24.0mm、⑥ 11.96g, 21.0mm、⑦ 12.59g, 21.0mm。これらの貨幣はいずれもガムラ遺跡の西区画で発見されている (Syon 2014: 189-190)。

参考文献

- Berlin, Andrea M., and J. Andrew Overman, eds. 2002. *The First Jewish Revolt: Archaeology, History and Ideology*. London: Routledge.
- Deutsch, Robert. 2017. *Jewish Coinage During the First Revolt Against Rome, 66–73 CE*. Tel Aviv: Archaeological Center Publications.
- Economou, Michael S. 2019. “The Coinage of the First Jewish Revolt: Context and Meaning.” *The Numismatic Chronicle* 179: 81–93.
- Epstein, Isidore, ed. 1990. *Hebrew-English Edition of the Babylonian Talmud: Tractates Sukkah & Mo’ed Katan*. London: Soncino Press.
- Goodman, Martin. 1987. *The Ruling Class of Judaea: The Origins of the Jewish Revolt Against Rome, A.D. 66–70*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Grabbe, Lester L., ed. 2021. *A History of the Jews and Judaism in the Second Temple Period, Vol. 4: The Jews Under the Roman Shadow (4 BCE–150 CE)*. London: T & T Clark.
- Hendin, David. 2021. *Guide to Biblical Coins*. 6th ed. New York: American Numismatic Society.
- Josephus. 1927a. *The Jewish War*, Books 1–2. Translated by H. St. J. Thackeray. Vol. 1 of *The Jewish War*. Loeb Classical Library 203. Repr., 1997. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- . 1927b. *The Jewish War*, Books 3–4. Translated by H. St. J. Thackeray. Vol. 2 of *The Jewish War*. Loeb Classical Library 487. Repr., 1997. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- . 1928. *The Jewish War*, Books 5–7. Translated by H. St. J. Thackeray. Vol. 3 of *The Jewish War*. Loeb Classical Library 210. Repr., 1997. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- . 1943. *Jewish Antiquities*, Books 12–13. Translated by Ralph Marcus. Vol. 7 of *Jewish Antiquities*. Loeb Classical Library 365. Cambridge, MA: Harvard University Press.

- Kadman, Leo. 1960. *The Coins of the Jewish War of 66–73 C.E.* New York: Schocken Books.
- Meshorer, Ya'akov. 2001. *A Treasury of Jewish Coins: From the Persian Period to Bar Kokhba.* Jerusalem: Yad Ben-Zvi Press; Amphora Books.
- Stern, Ephraim, ed. 1993. *The New Encyclopedia of Archaeological Excavations in the Holy Land.* 5 vols. Jerusalem: Israel Exploration Society.
- Syon, Danny. 2014. *Gamla III: The Shmarya Gutmann Excavations 1976–1989, Finds and Studies, Part I.* Jerusalem: Israel Antiquities Authority.

図1 ウェスパシアヌスとティトス

筆者所有



銀貨：デナリウス，25.0mm，15.18 g

造幣：紀元 69/70 年，ローマ

解説

表面（左側）には、ウェスパシアヌスの月桂冠を戴いた肖像があり、周縁にギリシア語で ΑΥΤΟΚΡΑΤ ΚΑΙΣΑ ΥΕ[ΣΠΑΣΙΑΝΟΥ]（「皇帝カエサル・ウェスパシアヌス」）の銘文がある。

裏面（右側）には、ティトスの月桂冠を戴いた肖像があり、周縁に ΦΛΑΥΙ ΟΥ[ΕΣΠ ΚΑΙΣ ΕΤΟΥΣ] ΝΕΟΥ ΙΕΡΟΥ（「新しい聖なる年のフラウィウス・ウェスパシアヌス・カエサル」）の銘文がある。

デナリウスは古代ローマにおける銀貨であり、当初は青銅貨アス（as）10枚に相当する価値を有していたが、紀元前140年頃のアスの切り下げに伴い、16アス相当へと変更された。ユダヤ貨幣体系において広く流通していたシェケル銀貨との比較においては、重量ベースで見た場合、1デナリウスは概ね1/4シェケルに相当すると考えられる。ただし、購買力や地域的な交換比率には一定の変動が認められる。

図2 銀貨 (シケル)
(第3年)

筆者所有



銀貨：シケル，24.0mm, 13.80 g
造幣：紀元 68/69 年，エルサレム

解説

表面には杯状の容器が描かれ、その上に古ヘブライ文字による鑄造年 $\aleph \omega$ ($\aleph \omega = g \dot{s} = 3$ 年) が刻まれ、周縁に $\aleph \omega \aleph \omega \aleph \omega \aleph \omega$ = שקל ישראל = 「イスラエル (の) シケル」の銘文がある。

裏面には3つに分かれた枝に実る3つのザクロの蕾が描かれ、周縁に $\aleph \omega \aleph \omega \aleph \omega \aleph \omega$ = ירושלים הקדושה = 「聖なるエルサレム」の銘文がある。

ユダヤ戦争の第1年目から第5年目までの銀貨は、年号と金種を除けば同一である。これらの貨幣の一貫性は、これらがすべて同じ造幣所、同じ職人によって鑄造された可能性を示唆している (Deutsch 2017:43)。

図3 銀貨（半シケル）
（第2年）

筆者所有



銀貨：半シケル，19.5mm，7.07 g
造幣：紀元 67/68 年，エルサレム

解説

表面には杯状の容器が描かれ、その上に古ヘブライ文字による铸造年 בש"ב ($\text{בש} = \text{bš} = 2$ 年) が刻まれ、周縁に לפניו של ירושלים = 「半シケル」の銘文がある。

裏面には三つに分かれた枝に実るザクロの蕾が描かれている。周縁には קדושה ירושלים = 「聖なるエルサレム」の銘文がある。

ヘンディンは、ミシュナのコダシーム（聖物）の巻「ベホロット篇」第8章第7節に、半シケル貨による神殿税への記述があることを引き合いに出し、ミシュナが3世紀に編纂された時点で、半シケル貨の神殿税がすでに認識されていたことから、貨幣学者たちは、ユダヤ戦争期においても半シケル貨が神殿税の支払いを目的として、シケル貨よりも優先的に特別に発行されていたと考えていると述べている (Hendin 2021:314)。

図4 青銅貨（1/8シエケル）
（第4年）

筆者所有



青銅貨：1/8シエケル，19.5mm，5.40 g
造幣：紀元 69/70 年，エルサレム

解説

表面には中央にナツメヤシの枝葉が束ねられ、その両側にシトロソ（柑橘類の果実）が描かれている。それらは仮庵祭で使用されるものである。周縁に古ヘブライ文字で、**שנת ארבע** = 「4年」の鑄造年が刻まれている。

裏面には杯状の容器が描かれ、周縁に、**לגאולת ציון** = 「シオンの贖いのために」の銘文がある。

戦争の第4年目の青銅貨（半シエケル、1/4シエケル、1/8シエケル）のすべてに描かれている象徴的なシンボルは、仮庵祭に関連している。仮庵祭の時季は耕作や種まきといった急を要する農作業がすでに終わり、農場を離れてエルサレムに巡礼することができる最も都合のよい時季であった。

「シオンの贖い」という表現は、それまでの貨幣に刻まれていた「自由」が武力によって達成されるものであるのに対し、「贖罪」は神の手によるものであるという、信仰に根差した表現であるといえる。

図5 青銅貨（プルタ）
（第2年）

筆者所有



青銅貨：プルタ，17.5mm，3.24 g
造幣：紀元 67/68 年，エルサレム

解説

表面には、両側に持ち手の付いたアンフォラ（ワイン壺）が描かれている。このアンフォラは、66年から69年にかけて鑄造された青銅製プルタ貨に採用されている。また、アンフォラは儀式的象徴としての意味を持ち、葡萄の葉と組み合わせることで装飾的要素としても用いられていた。

アンフォラの周縁には古ヘブライ文字で、 שנת שני = 「2年」と鑄造年が刻字されている。

裏面には、葡萄の蔓と葉が描かれ、周縁に חרות ציון = 「シオンの自由」の銘文がある。

図6 ガムラ遺跡遠景
(東から西を望む)

筆者撮影 (2018年8月)



図7 ガムラ遺跡 (要塞壁とシナゴグ遺構)
(東から西を望む)

筆者撮影 (2018年8月)



図8 ガムラで鑄造された貨幣

出典：Israel Antiquities Authority (IAA No.34234)
Syon 2014: 190



青銅貨：24.0mm, 13.80g
造幣；紀元 67 年、ガムラ

解説

シヨンによれば、ガムラで鑄造された貨幣は「文字は非常に粗末で、型抜き機が文字を正確に読み取れなかったことを示している。一部の文字は古ヘブライ文字（エルサレムのモデルを模倣したもの）に似ており、他の文字は第二神殿時代の方角アラム文字に類似している。さらに別の文字は、既知の文字体系には類似していない」としている（Syon 2014: 121）。

表面には「贖いのために (לגאולת)」と思われる銘文と、杯状の器が描かれている。ガムラ貨幣の銘文には、他に類例のない特異な字形が用いられているため、読みは未確定である。

裏面には「聖なるエルサレム (ירושלים הקדושה)」と思われる銘文が刻まれているが、「聖なる (הקדושה) の部分は略され、「הק」のみが刻字されていると考えられている（Syon 2014: 121）。

図9 ウェスパシアヌスの戦勝貨幣
筆者所有



銀貨：デナリウス・19.0mm, 3.11 g
造幣：紀元 70 年, ローマ

解説

表面には、ウェスパシアヌスの肖像があり、周縁にラテン語で、IMP CAESAR VESPASIANVS AVG（「最高司令官・皇帝・ウェスパシアヌス・尊厳ある者」の意）の銘文がある。IMPはIMPERATOR（「最高司令官」の意）の略号で、元々は兵士たちが戦場で将軍を「インペラトル」として称えたことに由来する。CAESARは皇帝の地位を示す称号であり、VESPASIANVS「ウェスパシアヌス」、AVGはAVGVSTVS「アウグストゥス」（「尊厳ある者」「神聖なる者」の意）の略号である。

裏面には、左側にあるヤシの木の傍で、両手を後ろ手に縛られ、うなだれているユダヤ人が描かれている。その下には[I]VDAEA（「ユダヤ」）と刻まれている。

ウェスパシアヌスは西暦69年7月1日にローマ皇帝として即位しており、本貨幣はその直後に発行されたものと考えられる。